



Title	特別支援学校における連絡帳を活用した教育実践報告
Author(s)	塩見, 啓一
Citation	学校臨床心理学研究 : 北海道教育大学大学院教育学研究科学学校臨床心理学専攻研究紀要, 14: 67-76
Issue Date	2017-03
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/9524
Rights	

特別支援学校における連絡帳を活用した教育実践報告

塩 見 啓 一*

An Educational Practice Report of the Teacher-Parent Corresponding Notebook Utilized at a School for Intellectually and Developmentally Disabled Children

1 はじめに

学校教育においては、保護者との連携は重要な検討事項である。特に障害のある子どもに対する教育、中でも知的障害や自閉症・情緒障害といわれる子どもたちへの教育においては、特殊教育の時代から、保護者の理解と協力はその子どもたちの教育に当たって、欠かすことのできない重要なものである。子どもの障害の種類や程度、保護者の意識によって、連携の内容も方法も千差万別ではあるが、障害のある子どもの教育をより適切に、かつ効果的にすすめるためには、学校(=担任)と保護者との間に信頼関係が築かれ、可能な限り密な情報の共有と交換がなされ、家庭と学校が相互に良好な関係のもとに役割分担と機能連携を図っていくことが求められる。知的障害のある児童生徒の教育においては、家庭と学校との情報交換の手段としての「連絡帳」の持つ意味は特に大きい。

筆者は、親交のある養護学校教諭から、連絡帳を通して担任と母親が互いに理解を深めるとともに、それぞれの役割を再認識し、子どもの成長のために協力して効果的に教育に当たることについて助言を求められた。そこで連絡帳を定期的に見せてもらいながら、指導内容や方法とともに、連絡帳の活用方法について協議し、適宜、意見交換を行い指導に生かしてもらった。

実践から10年ほどの時間が経過しているが、今日の特別支援教育が、これまでの障害児教育が積み重ねてきた実践知を参考としない傾向が多く見

られることから、あらためて2年間にわたる実践についてその成果を報告する。

2 対象の生徒と母親及び教諭

対象の生徒はA養護学校高等部の女子B子である。B子は認知機能に遅れがあり、言語を使用しての意思疎通には困難がある。情緒的に不安定であることが多く、不安定になると他害も見られた。小学校は特別支援学級に在籍し、6年生のときに養護学校へ転校する。中学部2年生の頃から、小児精神科を定期的を受診し、抗うつ剤、抗精神薬を服薬してきている。

B子の母親は娘の教育に大変熱心であり、地域の障害児の保護者団体に所属し、様々な活動を行ってきっていた。小学校当時のB子の様子を直接知ることができないが、多くの場合、情緒的に不安のある子どもは他の保護者や教師から十分な理解を得ることが困難であったり、母親は他の子や学校に遠慮しながら通学させていることが多く、母親の学校への期待は次第に少なくなっていく傾向が見られる。B子の母親は、養護学校転校後、特別支援学級との違いを認識したようである。

B子とC教諭との直接のかかわりは、高等部の2年生からである。

C教諭は、かかわって間もなく、B子が少しの配慮で情緒的に安定し、積極的に学習しようとすることに気がついた。

そこで、母親と連絡帳を交換することによって、

* Keiichi SHIOMI：札幌学院大学（北海道教育大学大学院学校臨床心理専攻・非常勤講師）

キーワード：教師と母親による連携教育、連絡帳、共通理解を深める

家庭での様子を探りながら、母親の考えを知り、協力して教育を進めることができないかと考えた。2年間にわたり、通学の際はほぼ毎日、交換した連絡は300回を超える。C教諭からの連絡帳はほぼ毎日500字を下回ることはなく、内容が次第に可視化していく。それに伴い、母親の記述もより具体的になり、交換する情報の内容がより高度化していく様子が窺える。文字数はC教諭からが7割、母親からは3割程度である。相互の情報によって、母親、C教諭ともにB子に対する見方、考え方が変化し、深まっていく様子を窺うことができる。

連絡帳の重要性を知っているはずの障害児の教育を担当する教諭であっても、それをどのように活用すれば良いかを熟知している教諭は多くない。連絡帳活用の困難性の第1は、母親の連絡帳への考え方を超えてやりとりをすることが難しいということである。連絡帳は、子どもに対する教育的愛情を伝えるものとしての内容が書かれていなければ、連絡のためのメモにしかない。

投げかけは、教諭の方からすることになるが、それに対する母親の反応を見て、その後の対応を考えていく必要がある。しかし、母親に連絡帳の活用を促すような工夫を試みる教諭は少ないように思われる。

連絡帳の活用に関する困難性の第2は、連絡帳を書く時間の確保の問題である。

「指導をしていれば、連絡帳を書く暇はない」とはよく言われることだが、学習課題の与え方を工夫すれば、その問題の解決はそれほど難しくはない。むしろそれは内容のある連絡帳を書かないための理由付けとして語られる方が多い。

ここでは、わずかな部分だけしか取り上げることはできないが、実際の連絡帳の1部を3期に分けて紹介し、連絡帳による指導の有効性について検討してみたい。

3 連絡帳のやりとりの実際【第1期】

養護学校への通学は、スクールバスの利用か、保護者の送迎による。毎日送迎の際に顔を合わせている場合は必要な連絡事項はそこで済ませることもできるので、連絡帳は必要ないと考える教諭

や保護者もいる。保護者との連携は、密であり、頻度が多いほど望ましいので、顔を合わせる機会、話し合いの機会が多い方が良い。しかし、「会話すること」と「文章をやりとりすること」には大きな違いがある。その違いは、最初のうちはほとんど気づかれない。

連絡帳のはじめはほとんどそのような状態から始まる。

一般的に学校からの連絡帳には、必要な持ち物や学習予定とその様子が簡単に書かれ、気になる行動があればそれが書かれ、時間的な制約もあって学習の様子が丁寧に書かれることは少ない。

保護者はそれを見て、同じように必要最低限の連絡事項を書くようになる。教諭も保護者も、連絡帳の役割はそのようなものと互いに理解し、そのような内容でのやりとりが行われる。

本報告の連絡帳もそのようにして始まった。

4月8日【学校から】

- ・1年間、2年生の8人の生徒と一緒に生活できることになりました。どうぞよろしく願います。
- ・細かなこと（これが一番大切なのだと思うのですが）でも、気が付かれたことを、いつでもお伝えいただければと思います。よろしく願いいたします。

4月11日【家庭から】

- ・家庭訪問ですが、19日にお願いしたいと思います。
- ・22日、通院、診察日のためお休みします。

しかしこの報告の連絡帳のやり取りでは、3日目にして、すでに少し違う雰囲気を感じられる。学校でのB子の様子を丁寧に伝えようというC教諭の意図が強く感じられる。

5月11日【学校から】

- ・2年生になって初めての「はがき作り」。久しぶりのはがき作りでしたが、今は体調のよいときなので、作業室ではがきを3枚作るこ

とに挑戦。

2, 3 回目の時は、同じように10数えても、長〜く、長〜く（3倍くらいの時間）数えたのですが、それもOKでした。数えおわると、アイロンを終えることも、スムーズにできました。

3回終えたところで、ちょうど「トイレ」と言ったので、「どうぞ」と言った時に「今日はもうちょっといけそうだけれどせっかく3枚目まで楽しく行えたのに、無理させて楽しさが消えてしまうのももったいないな。でも今日はもっとやれそうだな」などと考えているところに、ニコニコ顔のBさんが帰ってきたので、その顔を見ると「今日はおしまい、教室で休憩していいですよ」と言ってしまいました。でもニコニコの顔のまま作業室へ入ってきたので、「じゃあBさん、4枚目のハガキ作る？」と尋ねると、積極的に作業して、一人で全部OK。タイマーもバッチリ！いい表情で一人で作業しているBさんを見て、なんだか目がウルウルしてきました。（Bさん頑張ってるね、体調のいいときは見通しをもち、こんなに積極的に頑張れるのね〜）。二人で「手をパチン」をして、いい時間を二人で感じることができました。

多くの場合、必要最低限の連絡事項を書くことと、学校での生活の様子を丁寧に書くことの差に保護者が敏感に気づき、書く内容が変わってくるまでにはしばらく時間がかかるが、B子の母親はC教諭の意図を敏感に受け止め、書く内容を変えた。

5月12日【家庭から】

・今朝は、早起きしてして、尿をすませてしまったようです。私が6時に起きているので、その前に私が、「おしっこ紙コップへ」のカードを見せたときは、一応協力態勢でしたが、紙コップに採ることができませんでした。でも、協力的だったので、うれしかったです。

5月23日【家庭から】

・前回、通院の際、B子の「帰る、帰る」でD医師とほとんど話ができなかったので、今回は親だけで診察を受けてきました。躁うつものの周期の変動予防のために飲んでいた薬が効いていないということで、徐々にやめていく形になり、今回は半分になりました。前回試しに、処方されたお薬もやめるそうで、飲み薬が減ったので、何か変化があるかも知れません。その代わりに、自傷の時に、飲ませる液体の薬が新しく処方されました。15回分、早く効いて、すぐ抜ける薬で、副作用が少ないらしいです。

土曜日、日曜日の様子も貴重な情報である。また、医療に関する情報は聞き出しにくいものであるだけに、様子がわかるように書いてもらえることもC教諭にとっては大変有効な情報である。

小児精神科に通院し、かなりの量の薬を服薬していることは指導上欠くことのできない重要な情報である。現在のB子の状態が、障害あるいは疾病の所以であるのか、服薬の作用によるものであるのかの見極めは、最も重要な事柄の一つであるにもかかわらず、あまり語られることが多くない。

やむを得ず薬を飲ませなければならない母親の苦悩をこの時点で情報として得られたことは、今後のC教諭のB子への対応に少なからず良い影響を与えたことが推察される。

6月6日【学校から】

・2日からは、バスを降りてから小・中の玄関の方へ歩いて行って、中へは入らず、戻ってきて挨拶。今日は小中の玄関に行く階段の近くまで行って、様子を気にしているようでした。その後、まっすぐに来て、Bさんから挨拶。
・朝の会のあと、ニコニコして教師の顔を見てから廊下へ。様子を見ていると、視聴覚室の3年生の音楽を戸のところから見て、そしてトイレへ……。迎えに行くついでにトイレにはおらず、集会室の前の写真を眺めています。興味が広がってきているようです。視

力検査は左右とも1.2でした。すごい！

これまで、母親が最も頼っていたのは小児精神科の医師であったと思われる。「ソウ」「ウツ」など、医師から聞いた精神医療の言葉や知識が頻回に書かれることとなる。

6月7日【家庭から】

・ソウになると行動の範囲が広がりますね。「あら？いない……」という思いは、私も経験しています。ウツのときは、予想がつくのですが、ソウの時は、思いもしないことにこだわったり、よく手を焼きますね～。でも、現時点では、毎日楽しそうに生活していますね。学校では、特に、ウツ傾向の時との違いですが、出てますね。これ以上激しくならないといいのですが。薬の量が減って、半月以上経っているので、ソウも、強く出てしまうのかも知れません。

障害のある子を医学的な診断名や症状名で語ることが障害児教育の中に横行しているが、それはその子の個性や生育歴、育ち方を考慮しないことにつながる。B子の母親でさえ、いつの間にか医学の言葉に翻弄されてしまっているのではないかとと思われる。C教諭がそのように考えたかどうかは不明だが、医学の言葉ではなく、教育の言葉で子どもを見つめようとする姿勢は重要である。

C教諭は、B子をそのように捉えるのではなく、別な言葉で捉えようとして「元気度」という項目を考えた。

6月7日【学校から】

・Bさんの状態については、良い状態、ソウの状態、ウツの状態とあるようで、お母さんともノートで今の状態を確認しながら、次の状態も予想し、対応を考えて、B子さんの良い状態が少しでも長くなり、ソウの時でも、本人があまり苦しくならないようにと考えているのですが、状態の変わっていく様子がわかりやすいように、数値で表すことを考えてみました。勿論大まかなものですが、ウツからソウまで

を1～10の段階として考え、5を普通の状態として、4(少しウツ)＝笑顔は少ないが指示には従う、7(少しソウ)＝笑顔多く興味広がる、3(かなりウツ)＝だるそうにしている、指示が通らない、8(かなりソウ)＝こだわりが強い大きな声で名前を復唱することが多い、待てない、みんなと一緒に活動が難しい。例えばこんな感じで、4～7までは、状態は違っても、Bさん自身、あまりつらそうではない状態と考えることにしたいと思います。内容についても一緒に考えていければいいなと思います。

一概には数値化できませんし、こういう状態もあるけれど、ここはすごく良い、など様々な場合が出てくると思います。例えば今の状態であれば、ソウ期の様子は見られるけれど、笑顔も多く、楽しんでいるので学習は◎で、5～6の状態であるとか、Bさんの状態をお母さんと一緒に考えて、大まかに共通理解できるといいな～と考えています。お母さんがおっしゃるように、ソウ状態も、Bさんらしさが出て、例えば7くらいまでなら、良い状態であるとおさえるなどとしてはどうかと考えます。Bさんのつらい状態(8や9)にならなければいいなと思うのです。なったときには、なるべくBさんがダメージを受けないで、その時を過ごせるといいななどと考えています。よい状態のBさんは、頑張れるので、できない状態の時のBさんは、つらいだろうと思うのです。できない状況を理解してあげたいと思うのです。

一ヶ月後には家庭からの記述量が劇的に増えてくる。保護者がここまで書くようになるためにはC教諭が、指導の内容・方法を失敗も含めて具体的に書き続けていたことによると思われる。障害児に対する教育には過ちや失敗がつきものであるが、それが語られることは少ない。C教諭は連絡帳の中で、指導の経過や成果を母親とともに考えていきたいとの思いから、むしろ積極的に失敗も書いている。悩みや喜びを共有したいとの思いが母親の信頼を得ることにつながったのではないかとと思われる。

4 連絡帳のやりとりの実際【第2期】

C教諭は、連絡帳の様式を変えた。母親と教諭が同じ項目に記入することで、共通理解を深めようという試みである。健康チェックを〈元気度〉として、数値化を試みている。これは一定の効果を上げたことが伺える。情緒的な安定度を確かめるために〈常同行動等〉という項目を設け、B子の今の状態を知り、指導を的確に行うための重要な手がかりとしている。〈トイレ〉は定時排泄を目的としたものであり、〈睡眠〉は覚醒度を知るためのものである。本報告では、この部分は省略するが、家庭と学校、すなわち母親と教諭の間で、指導に役立てようとする内容・方法の共通理解ができれば、必要な項目が見つかり、連絡帳の様式は自ずと工夫され、指導を効果的にするために有効な場合が多いと思われる。

8月26日【学校から】

- ・お母さんがおっしゃるように、昨年は待つことが苦手な時期だったので、今年はどうだろうと思ひながら臨みました。前に少し休んでからお風呂に入りました。
- ・お風呂では身体を洗ってもらった後でちょっと足りなさそうな所を指さしと一緒に言葉をかけると、もう一度洗っていました。特に足の所は、ちゃんと洗面器を置く台に足を上げて洗っていました。エライ！シャンプーは最初と最後に「10」ずつ洗ってもらいました。OKでした。
- ・すみません。帰り改札口で切符を入れて、その後、お財布（切符入り）を落としたようです。ごめんなさい。同じようなものを捜してみたいと思います。本当にごめんなさい。

8月27日【家庭から】

- ・昨日、パパに「Bちゃん、今日学校で何したの？」と聞かれ、「朝の会、お風呂、帰りの会」と答え、「お風呂に誰と入ったの？」には、はじめ意味が理解できなかったようですが、パパが指で「チョコキ」の形を作り、「こっち

はBちゃん、こっちは？」と聞くと、理解できたようで、「Cセンサー」と答えていました。「何食べたの？」には「カレーライス」と自信たっぷりに答えていました。☺ こんなに「温泉に行こう」を楽しめるとは思わなかったの、ホント、ウレシー♡

- ・お財布のこと、大丈夫ですよ？ 次のが見つかるまで、家庭用を使って下さい。ポシェットの中に入れておきます。使いやすそうなものを見つけて用意しておきますね☺

信頼関係ができたことで、何が重要なことで、何がとるに足らないことかを互いに理解することができるようになっていく。互いに伝えるべきことを端的に書けるようになっていく。

10月20日【学校から】

- ・教室で貼り絵をしました。他の生徒の指導もしながらBさんの様子を見て、「どんぐりコロコロ」とコチョコチョのリクエストしながら熱心に取り組んでいました。Bさんの手元を見ていて、ふっと視線を感じて目を上げると、Bさんが私の顔を笑顔でのぞき込んでいました。なんだかとてもあったかいまなざしで、うれしくなりました。

10月21日【家庭から】

- ・Bは、相対している人の感情をもらいに受け、同調してしまうことが、幼い頃からありました。（例えば、赤ちゃんが泣いていると、一緒に泣く。誰かが怒っていると、自分も結構微妙なところまで伝わる子です。）
- ・先生に対しての「あったかいまなざし」は、いつもBが、先生から同じようなまなざしを受けているのを、しっかり感じているのでしよう☺。

「あったかいまなざし」を共有できる子どもと母親、そして教師がどれくらいいるであろう。連絡帳は、本物の実践と書き方の工夫次第で、言葉にできないコミュニケーションをも伝えることが

できるといえる。

11月9日【学校から】

・Bさんと一緒に行動するとき、最初からその活動の全工程を行う（次第に支援を減らしていく）方法がよいか、その活動の始めから順に少しずつ行う（次第にできる活動を増やしていく）方法がよいのかはいつも悩むところ です。

Bさんと一緒に行動して思うのは、元気が8以上でなければ、どちらの方法でも受け入れて活動できる力があるということです。すごい！

力を獲得するためにはどちらが効果的なのかは、様子を見ながら考えていきたいと思いま す。

・Bさんがスムーズに行動を変えたときなど、ヤッター！という感じでうれしくなりますよ ね。

もしうまく流れなかったときでも、こちら側で、この方法でうまくいくかどうか等を一度イメージしておく、余裕を持って対応でき ますよね。

11月10日【家庭から】

・その時々で、人格的に変化してしまう娘の活 動を支援する方法は、難しいですよ。私にと っても今後の課題ですね。

母親もC教諭も、指導の難しさを共通理解して おり、その上で前向きに考えていこうとする姿勢 が伺える。学校、母親双方からのやりとりが深化 し、B子を見つめる眼差しが共有されることで、 互いの絆のようなものが生まれている。

11月17日【家庭から】

・昨日、センターのボランティアに入り、B子 にTV雑誌を買うことをすっかり忘れていた ところ、デイサービスから帰るとすぐ、「テ レビジョン」と要求。何度も繰り返していま したので、パパと一緒に買いに行ってもら ったところ、「お金を持たせたら普通に買い物

してたぞ」とのこと♡😊😊😊😊

理解のある父親であってもB子にはいつも特別 な配慮が必要と思っていたのかもしれない。娘の 具体的な成長に気がついた父親の言葉やデートの 様子などが連絡帳に度々登場することになり、連 絡帳は父親も含んだものになり始めた。

5 連絡帳のやりとりの実際【第3期】

5月17日【学校から】

・お薬受け取りました。わかりやすい方法です ね。荷物も薬も準備大変でしたね。同じ親と して頭が下がります。

・朝の靴の脱ぎ方なのですが、私が他の生徒さん と挨拶をしているとき、いつもの位置がふ さがっていたので掴まるところがなく、(掴 まるところがないときの指導をしていません でした。Bさんごめんなさい)今日は残念で した。次回からの報告、楽しみにして下 さい。

・今までの流れをチョット変えたり、違う指導 が入ったりということは、Bさんにとっては 苦手なことだと思いますが、とてもスムーズ に活動を続けることが出来ることが多く、B さんのこれからの可能性や大きな力を実感し ます。これからの一年がとても楽しみです

・水曜日のノート、とても楽しみです。Bさん が、火曜と水曜日の朝にいろいろ考えて行動 している様子がわかります。ノートのおかげ で、Bさんの心の動きがわかるような気がし ます。

・朝の課題学習で、曜日を一緒に漢字で書いて います。「月」は一人でOK。「火」と今日「水」 は言葉がけだけで書きました。うれしかった ので持ち帰ってもらいます。(金曜日にまた 持たせてください)文字は1年生の時の方が、 小さくて落ち着いていたと思います。ごめん なさい。

5月18日【家庭から】

- ・漢字の学習，がんばってますね．やる気があるってことが何より．すばらしいデスネ♡
- ・生協から帰って，靴を脱ぐとき，いつもの脱ぎ方をしていたので，「足，足」と声をかけると，玄関の床から一段足を上げられました．スゴイ！！声がけの後にも別に嫌がるふうもなく，応じてくれたし，うまくいくかも．先生のおかげです．ありがと～．♡

日常生活の小さな動作に関する指導の方法は，家庭と学校，教師同士で異なることが少なくない．情報を共有し，同じ方法で指導することにより，子どもは混乱せず，納得して理解するのではないと思われる．

12月18日【家庭から】

- ・生理になったようです．夜，寝るとき布団に横になると，「おなかいたい」と言っていました．「イタイネー，生理だからイタイタイ，かわいそうにねー」となでてやったら，突然「とんでけー」と言いました．わたしもリピートしてやりました．「イタイノイタイノトンデケー」「ふいて」は家でも言ったことはないです．めずらしいですね．先生の言葉が心の中にたまっているんですね．ステキ♡
- ・この頃の学校での様子を読んでいると，周りの状況を感じ取り，自分が何をすべきか考えて，行動することが見られるようになり，うれしく思っています．安心できる環境でなければ，周りに気を配る余裕は生まれえないと思うので，何かあってもわかってもらえるんだという，人とかかわりの中での安心感がB子の成長には欠かせないものなんだと再認識しました．

一般的に，情緒的に不安定な子どもは，家庭で話す言葉の一部しか学校では話さないことが多い．教師が年度末に「話す言葉が増えた」と評価しても母親にとっては，「家庭で話す言葉の一部を学校でも話すようになっただけ」と捉えることは少

なくない．家で話したことのない言葉を聞いた母親は，素直に驚きを伝えている．

母親は，冬休み中も日記のように毎日連絡帳に記録をつけていた．

12月27日【家庭から】

- ・私が，進路懇談にうかがっている間，Bはパパとケンタッキーに行っていたそうです．夜，スケジュールに「明日は〇〇に行きます」と書き加えた後，興奮したのか，寝ません．そして「きょうのスケジュール」と言ってノートを手渡してきたので，明日のことが気になるのだなと思い，わかる範囲で〇〇のスケジュールを書いてあげました．

1月17日【家庭から】

- ・そうそう……始業式の前日の夜，小さくかわいい声で「C・せ・ん・せー」と言っていました．
「あした，あつたら オハヨーっていうんだよ」とか「久しぶりー」とか言ってやるとうれしそうでした．スケジュールを見て，「あした先生に会えるよ」とわかったんだな～と思ひ，うれしくなりました．

長期休暇中の様子は教師にとって貴重な情報であるが，それを連絡帳等で知る機会はありません．この情報を受け取って高等部3年生の3学期が始まった．この内容を読んでC教諭は3学期に向けてあらたな意欲が生まれたものと推察される．

1月17日【学校から】

- 3学期になって，休み中のノートを読んで
- ・Bさん，自分の意思が伝わって，できることが増えれば人生楽しいですね．自分の思い，気持ちを伝えられることは，お母さんが書いているように，何よりもうれしいことですよ．大切なことは，持っているもの，学習したことで，自分の思いが伝えられること．お母さんのように，しっかりと思いを受け止めてあげられ，伝わったことを確認することができれば，たとえ全ての思いが叶わなかったとし

でも、納得できるだけの力がついてきているのだと思います。でも、その度毎には、反応の如何を予想できるわけではないので、ドキドキしますよね。そのやりとりが可能なことが、またすばらしいのだと思います。人と人とは、ドキドキしながらやりとりを重ねなければ、何かを共有することもできないし、仲良しにはなれないですよ。

など)

そう考えると、B子は、高2、高3でかなりの奇跡を起こしたことになりますね。すごいことだな〜と感動♡♡ 教える人によって、こうも違うんですね。ジーン

1月17日【学校から】

・笑顔一杯の登校、こちらまで幸せな気分になる笑顔でした。登校直後、汗をかいており「麦茶」とリクエストがありました。「始業式が終わったら飲もう」と文字と言葉で伝えて、始業式が終わったときに私が麦茶を運んでくると、「むぎちゃのむ」と言いました。

・朝や始業式の時、顔をくっつけてきて、B子さんの気持ちを、たくさん教えてくれています。

冬休みの間にあったこと、ノートのおかげで、わかることがたくさんあるので、いろいろと聞いてみたい気持ちになります。

短い3学期であっても適切に指導することによって、学習の成果は現れる。

2月28日【家庭から】

・帰宅して、なにげに、長靴を脱ぐ様子を眺めていたら、驚いた！左足をまず振って脱ぎ、(ここまではいつもと一緒)脱いだ足は、一段高くなっているところにちゃんとして、左足の足先で、右足の長靴のかかとをギューとして押さえるようにし、ちゃんと脱げました。

左足の足先を使うのは、初めて見ました。感激です♡アリガトー♡

18歳にして、ボトムアップがスムーズにできることは、本当に稀なことだと聞いています。かなりの信頼関係と指導力がなければ無理だということを、先日、Dさんの講演を伺ったときに言っていました。(うまくいかないストレスで、不安定やパニック、行動障害が多発

6 学校からの最後の連絡帳

連絡帳のやりとりにより、母親もC教諭もB子の教育的課題を見直しながら対応に修正を加えてきた。母親とC教諭の対応の変化により、B子には、これまでとは違う成長が見られたと思われる。

卒業が間近に迫り、B子の成長と2年間の連絡帳のやりとりの効果をまとめるべく、C教諭と連絡帳のやりとりを通した保護者とC教諭との連携による教育の成果について協議、分析を行った。

C教諭は、その結果を最後の連絡帳として、以下のようにまとめて母親に伝えることにした。

お母さん、Bさんの高等部卒業、おめでとうございます。本当にお世話になりました。

一方的な情報の押しつけに、丁寧に応えていただいたことにも、心からお礼を申し上げたいと思います。おかげさまで、毎日のBさんとのかわりにどれだけ勇気をいただいたかわかりません。効果のあるお薬ほど、副作用は覚悟しなければなりません。そのお薬を飲まなければならないBさんと、飲ませなければならないお母さんの苦しみに気がついたところが、Bさんとのかわりの出発点ではなかったかと思います。いつも体調が万全であるわけではないにもかかわらず、一生懸命頑張っていたBさんと、それを毎日、さりげなく支えていたお母さんの生活に、ほんの僅かですが仲間入りさせていただいたことで、本当にたくさんのことを感じさせていただき、学ばせていただきました。「言葉の持つ意味の多様さ」と同時に、「言葉を使わずに伝えるものの大切さ」を考えたとき、日常、何気なく人と言葉を交わしてかわりを持ち、理解し合っていると思い込んでいることについて、注意深く見つめ直してみることの必要性をBさんが教えてくれました。Bさんとの

相互理解ができてくるに従って、ほんの僅かですが、Bさんのつらさ、苦しさがわかるようになりました。それと同時に、Bさんの望んでいることも、少しずつわかってきたように思えたのです。

幼少期、母親をはじめとする周囲の人に甘えることで人は成長します。甘えることを拒否せざるを得ない様に生まれてきてしまったかも知れないBさんを、精一杯の愛情でつつんできたお母さんの努力は、Bさんの中では確実に実を結んでいったのだと思います。自分が「人間として存在を支えられていると思えること」が脳の活性を高めていくのだそうです。そうであれば、愛情は必ず脳を活性化すると思うのです。

お母さんがいつかのノートに「ルーチンは愛で変えられる」と書いてくださいました。その通りだと思うのです。自閉症に関する全ての本に、「それでも母親の愛があれば、どんな課題も解決できる」と書き加えたいほどです。

Bさんは自分の思いを表現する力が十分ではなかったのだと思うのです。お母さんにも、感謝の気持ちをどれだけ伝えたかったことでしょう。

常に頭の中が、整理されていて、記憶や感情をコントロールするという事は難しいとしても、霞がかかったように前が見にくい状況の中を手探りで歩いていかなければならないとしても、「人とかかわることは楽しいことだ」という体験を積み重ねることで、勇気をもって前に進もうとする意欲は、出てくるものではないかと思うのです。そのための手がかりを、Bさんは一生懸命捜していたような気がします。

一緒に手遊びや歌遊びをしながら、つらいトレーニングや作業、音楽に取り組んでいく中で、お互いの中に確実に育つものができあがったように思います。いくつになってからでも、いくらでも成長できることを、Bさんは教えてくれました。漢字を覚えることも、作業で作品を作ることも、Bさんが、覚えたい、作りたいと伝えてくれたからできたことです。嫌なこと、したくないことも教えてくれたからこそ、なるほどそうなのかと内容や方法を変えることができました。

Bさんと私の間の小さな変化を、一緒に喜んでくださったお母さんに、どれだけ勇気をいただいたことでしょうか。家庭でのBさんの様子を詳細に伝えていただいたことも、かかわる際の貴重な手がかりになりました。

眠ることのできないBさんへの大変な対応を、苦勞を感じさせず、さりげなく伝えてくださるお母さんの姿勢にも、わかりにくい文章を読んで、お返事を書いてくださったことに対しても、心から敬意とお礼を伝えたいと思います。

お母さんの支えはこれからも必要だと思います。お母さんのご苦勞が、これからも続くことを思うと、何もお役に立てない自分が申し訳なさで一杯です。無遠慮に言わせていただくことをお許しいただければ、もうかかわることのできない寂しさと残念さを胸一杯に感じています。でも、お母さんとのかかわりさえあれば、Bさんは間違いなく成長していくと思うのです。つらい状況を改善するためのお薬は、やはり残念ながらホルモンのバランスを崩したり、睡眠と覚醒のリズムに不自然さを助長したりしてしまうでしょうし、集中力や持続力を妨げたりもすると思うのです。それでも、お母さんとの2人4脚には、それに負けないだけの「愛の力」があります。Bさんに、力強く前へ進む勇気を生んでいくと思います。お母さんの思いを、今まで以上にしっかり受け止めて、どんどん素敵な女性になっていくと確信しています。

ごめんなさい、お父さんを忘れていました。子育ての主役はなんといっても母親だと思います。これは私も少し自信があります。でも、だからこそ、お父さんの手助けは重要です。Bさんも、お父さんと二人だけの時間は、期待と緊張で一杯の、貴重な時間だったと思います。これからはお父さんにとっても、今まで以上にステキなお嬢さんとのデートの時間が、大切になるのではと思っています。これからのBさんとお母さんに、お父さんも仲間に入れたご家族に、心からのエールを贈りたいと思います。

(心からの感謝とお礼を込めて。)

Bさんのお母様へ

Cより

7 まとめ

B子が驚異的な成長を見せたのは、B子の母親とC教諭の協力による情熱的な指導によるものである。知的障害児の認知力の限界という視点からすると、高等部2年生になってからのこの変化は、C教諭に出会うまでの教育がB子の成長の可能性を過小評価していたからという厳しい見方もできる。

その中で母親との連絡帳が果たした役割はどの程度であるのかを確かめるためには、もう少し詳細な検討が必要である。しかし、連絡帳のやりとりによってB子と母親、そして教諭は確実に成長した。

障害のある子どもを持った母親は、我が子の障害を認知した時から、子どもと共に障害のある子どもの母親として成長することを求められる。

熱心な母親は障害の理解のために学習することを始める。障害の種類や程度によっても異なるが、母親が最も期待するのはやはり学校教育である。しかし、特に情緒的な課題のある子どもの場合、その期待は数年で裏切られることが多い。裏切られるだけではなく、はじめにも書いたように、周囲からも、他害や社会性の未熟さについて責められることになることが少なくない。期待は遠慮や不信に変化し、やがて無関心につながることもある。そうなれば学校教育への期待が減り、子どもの成長への期待も薄れていくことになってしまう。

しかし、障害があっても、何かのきっかけで子どもは成長する。子どもが成長すれば母親も成長する。ここでも相互作用が働くのであろう。B子の母親は、元々B子に対し熱心に子育てをしてきたが、周囲からの支援は必ずしも十分とはいえなかったように思われる。しかし、C教諭の熱心な指導によって（ほとんど諦めかけていた）B子の成長していく様子を連絡帳によって詳細に知ることができた。そもそも連絡帳がそのようなものであることをC教諭からの連絡帳によって初めて知り、自分も情報を発信することにしたのではないか。そこから連絡帳の機能が格段に向上した。C教諭の指導も母親の協力を得られることにより、一段と成果を上げることができた。

連絡帳は、B子自身に直接関わらない、関係者

同士の情報の交換でしかない。しかし、連絡帳の持つ教育的意味により、B子に直接関わることの多い母親と教師が相互の情報交換で成長していくことにより、B子が成長することとなった。そのことについて、母親はC教師に感謝のコメントを最後の連絡帳とした。最後にそれを載せ、報告のまとめとしたい。

C先生へ贈る言葉

Bをととても可愛がってくれたC先生……不安定になってあきらめかけていたBの成長にたくさん思いやりと教育的工夫で希望を与えてくれたC先生。Bは、愛されれば愛に応えることができる子だと思わせてくれたC先生。先生は神様からのプレゼントでした。今日まで本当にありがとうございました。

B母

付記

連絡帳の閲覧と引用にあたっては、論文の公表という使用目的や登場人物の匿名化などの倫理的配慮等について、十分に説明した上で、B子の母親、C教諭から許諾を得ている。

引用した連絡帳は全体のごく一部であり、引用した連絡帳も、その日の全文ではなく、本報告に必要なと思われる一部分を抜粋したものである。